

平成21年3月31日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17791627
 研究課題名（和文） 演劇製作を用いた家族システム学習の効果の検証および日本型学習モデルの構築
 研究課題名（英文） Development of Learning Models of Family Systems Nursing by Making Family Drama
 研究代表者
 小林 奈美（KOBAYASHI NAMI）
 鹿児島大学・医学部・教授
 研究者番号：90311406

研究成果の概要：

日本における家族システム看護学習を支援する方法として家族の苦悩をテーマとする演劇製作を用いたプログラムを確立し、その効果を検証、さらに学習プロセスをモデル化する試みを行った結果、演劇製作は初学者の家族アセスメント能力向上に対して有効であること、家族面接を実施できる上級実践の学習までには、経るべき段階があり、段階に応じた臨床実践の応用可能性が明らかになった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	2,000,000	0	2,000,000
2006年度	0	0	0
2007年度	800,000	0	800,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
総計	3,400,000	180,000	3,580,000

研究分野：医歯薬

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：看護学、家族看護学、家族システム、学習モデル、演劇

1. 研究開始当初の背景

家族システムの理解は家族看護実践に不可欠な概念であるが、看護学生にとってその習得は容易でない。諸外国においては、家族システムとしての学習法や方法論、その波及効果について研究・報告され¹⁾、とくにロールプレイや問いかけ表現の演習はその理解に有効であるとの報告がある。わが国の本格的な家族看護学教育が開始されて10年、大学では小児・母性看護学や地域看護学の一部として教授されることも多く、内容にばらつきがあると考えられるものの、その実態および学習評価に関する報告はほとんどない。高齢少子社会や在院期間短縮を背景に家族看護実践への期待は高まっており、早急な実態の把握が必

要である。また、血縁を重んじる日本人の家族観は欧米諸国とは異なる構造を持ち、臨床実践のためには、日本人の家族観に基づく学習法とその評価が必要である。本学では、家族システムモデルとしてCalgary Family Assessment/ Intervention Modelの講義と平行して「病による家族の苦しみを表現する」というテーマの演劇製作・発表を試みており、学生による評価から、家族システムの概念理解に有効である可能性が示唆されている。そこで、この学習法の短期・長期効果とその概念的構造、文化的特色を詳細に検討したいと考えた。

2. 研究の目的

本研究では、3年間にわたる研究期間において、次の4点を研究課題として取り組んだ。

- (1) 看護教育を行っている国内の大学および大学院を対象に家族看護学の学習内容・方法等についての調査を行い、実態と傾向を明らかにする。
- (2) 家族システムに関する知識および概念理解等に関する学習の短期効果について授業前後で評価、さらに追跡調査することで、臨床看護実践および地域看護実践への長期波及効果を検証する。
- (3) 演劇製作のプロセス・発表を分析することにより、表現された家族観とそれに基づく家族システムの観察可能な学習効果を抽出する。看護学のみならず家族心理学、教育学などの既存の理論と照合しながら、看護学生の家族システム学習過程の構造を解明し、概念モデルを作成する。
- (4) 家族システム看護教育に取り組む海外の研究者との議論をとおして概念モデルの文化的特色について詳細に検討、比較研究に発展させるための仮説を得る。

3. 研究の方法

各研究課題達成のため、以下の方法で研究に取り組んだ。

- (1) 看護学教育を行っている大学・短大・専門学校で Web 上で住所を公開している学校の家族看護関連科目担当者に対して、郵送でアンケート調査を行った。内容は学習内容・教育方法、教育上の困難等である。分析は統計学的手法で行った。
- (2) 当初は学部学生と大学院生の追跡調査を計画していたが、予算と協力者の関係から学部生の追跡は断念し、大学院生と家族看護の自主研究会参加者を対象にした。製作された演劇内容の分析、学習プロセスの分析、臨床上の効果についての分析を行った。また、異なる地域の大学院生が作成する演劇の内容を比較することにより、演劇に表現される日本的な家族観について検討した。
- (3) 独自に開発した演劇製作を用いたトレーニングプログラムと近接領域である家族心理学、家族療法の技術トレーニング方法の比較・検討を行った。
- (4) 家族システム看護研究の第一人者であるライト博士、ベル博士（カナダ）と研究の成果について議論を行った。オーストラリアの研究者については、予定していた研究者が休職したため見送った。

4. 研究成果

(1) 2005年度

①学習過程分析のための資料収集および予備研究

2005年度は学習内容をできるだけ標準化するために教材を作成した。それを用いて行う本調査のために、試験的撮影・録画を行い、録画データの分析枠組みを検討した。その結果、撮影時のセットの不備、録画の技術等の修正点が明らかになった。また、データの分析枠組みとして、カルガリー家族アセスメントモデル/介入モデルが応用可能であること、ディスコース分析やエスノメソドロジーも有用である可能性が把握できた。予備的分析の結果、演劇を用いた家族看護の学習過程には、学生個人の家族体験の振り返り、家族文化の投影及び病と家族関係の相互作用の理解が含まれることが示唆された。また、学生にとって、表出的機能として表現された演技から、家族関係の根底にある膠着した関係を推測するのは困難な作業であり、演劇の体験だけでは学習することが難しく、家族に関する広範な知識に裏付けられた専門的な助言が必要であることが示唆された。

②短期・長期効果を検証するための調査項目の検討

海外の先行文献を整理し、調査項目を検討した。長期効果に関する論文はほとんどなく、短期効果に関する論文が多かった。家族看護の諸理論の理解とともに、家族の捉え方、家族看護の捉え方、援助姿勢の変化などを質的に探求した研究が多かった。

◆2006年度は育児休業のため実施せず。

(2) 2007年度

①家族看護学教育の実際

大学、短大、専門学校における家族看護学教育の内容と手法について教員を対象にアンケート調査を行った結果を分析したところ、家族看護を専門にする教員が担当する割合は、専門学校5%、短大11%、大学37%と大きな差があり、教育手法としてグループワークは大学が多く(61%)、ロールプレイは短大(60%)、大学(70%)であった。家族劇の制作は短大(15%)で多く実施されていた。

②家族システムの学習効果の検証

学部生を対象にした量的調査については、予備調査の段階で学習効果については個人差が大きいこと、それが学生個人の家族体験に由来する可能性が示唆された。そこで前後評価を行うのではなく、その点について家族看護教育に携わる教員にアンケート調査を実施した。その結果、家族関係への興味、家族の多様性の受容、学生の人間の成熟度、家族背景の学習への影響をいずれも多く支持したのは、短大の教員であり、専門学校の教

員は皆無、大学教員は家族関係への興味と多様性の受容のみであった。一方、大学院生を対象に演劇制作をとおした家族システム学習による自己変容について、各人のリフレクションレポートとグループインタビューを行った結果、いずれも家族の見方の変化を挙げたが、家族の苦悩に迫ることはできなかったと語った。

(3) 2008 年度

① 質的調査による家族システムの学習モデルの要素抽出

演劇制作によって十分な学習効果が得られるのは、ジェノグラム・エコマップとカルガリー式家族アセスメントモデルを使用した項目ごとのアセスメント能力であった。とくに、機能面のアセスメントでは、表出的なコミュニケーションのパターンを円環パターンとして捉えることにより、家族システムと病の苦悩の相互作用を理解することができるようになっていた。一方で、「ビリーフ」の理解には個人差があり、制作した演劇を振り返り、苦悩の根源となる「コア・ビリーフ」を推測する能力の学習には十分ではなかった。そこで、制作した家族を対象に、相談面接の場面を想定した模擬面接を行い、技術水準の異なる面接者による面接を実施、それを振り返ることによる学習効果を調べた。しかし、面接における状況を認知・概念化する技術レベルの水準によって、理解の度合いが相当に異なることが明らかになり、家族システム看護の技術習得、とくにビリーフを中心とする理解には認知・概念化する技術に依存する段階があることが示唆された。一方で、研究協力した学習者のほぼ全てが自分の臨床看護がより良い方向に変化していると分析していた。

② 海外研究者との意見交換による学習モデルの検討

それぞれの段階における技術がどのように臨床で活用されるのか、段階に応じた知識の臨床移行を調べることによって、段階ごとの臨床技術確立を探索する意義を確認した。

学習ステップ	学習内容	学習成果	評価方法
家族システムの理解に関する技術	ジェノグラム・エコマップを描ける。 家族の苦悩を描く。 家族を思いやることができる。 患者の苦悩を通して家族を捉え、定式化された知識を家族に対して行うことができる。 あらかじめ準備されたルーチンとしての標準的知識を家族に対して行うことができる。	家族の苦悩を描くことができる。 患者の苦悩を通して家族を捉え、定式化された知識を家族に対して行うことができる。 あらかじめ準備されたルーチンとしての標準的知識を家族に対して行うことができる。	質的評価から患者及び家族へ関与的関与項目による家族看護技術の理解度など
家族システム看護に適用する技術	家族システム看護の理論を習得し、実践に適用することができる。 患者の苦悩を描くことができる。 患者の苦悩を通して家族を捉え、定式化された知識を家族に対して行うことができる。 あらかじめ準備されたルーチンとしての標準的知識を家族に対して行うことができる。	家族システム看護の理論を習得し、実践に適用することができる。 患者の苦悩を描くことができる。 患者の苦悩を通して家族を捉え、定式化された知識を家族に対して行うことができる。 あらかじめ準備されたルーチンとしての標準的知識を家族に対して行うことができる。	質的評価から患者及び家族へ関与的関与項目による家族看護技術の理解度など
家族システム看護を評価する技術	家族システムの理解を深め、必要となる知識を習得し、実践に適用することができる。 患者の苦悩を描くことができる。 患者の苦悩を通して家族を捉え、定式化された知識を家族に対して行うことができる。 あらかじめ準備されたルーチンとしての標準的知識を家族に対して行うことができる。	家族システムの理解を深め、必要となる知識を習得し、実践に適用することができる。 患者の苦悩を描くことができる。 患者の苦悩を通して家族を捉え、定式化された知識を家族に対して行うことができる。 あらかじめ準備されたルーチンとしての標準的知識を家族に対して行うことができる。	質的評価から患者及び家族へ関与的関与項目による家族看護技術の理解度など

(4) 成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究は家族システム看護という技術分野において国内外に類をみない研究であり、国内における成果公開ニーズも高く、この3年間の研究を通して構築した学習プログラム及び学習プロセスを主軸に2冊の著作(主な発表論文等、図書を参照)として発表することができた。演劇制作を用いた家族システム看護の教育は、全国の看護教育機関で取り組まれ始めている。

英論文として国外への誌上発表を行うのはこれからであるが、成果の一部は、2009年6月に第9回国際家族看護学会(アイスランド)で発表予定である。また、ライト博士、ベル博士との議論の中で、成果に対し高い評価を得ており、学習段階に応じた家族システム看護技術の臨床還元について、今後ベル博士らと国際比較研究を行う予定である。

(5) 今後の展望

本研究の成果をもとに、このプログラムと学習モデルによる家族システム看護の学習効果がいかに臨床看護技術へ転換されるのか、それを看護師がどのように認識するのかについて質・量の両側面から検討を進めていく予定である。量的側面については、国際比較研究に発展させる予定であり、すでに測定のための日本語版尺度開発の研究準備が進んでいる。質的側面については、認知症高齢者の転倒リスクマネジメントに対し、家族システム看護技術がどのように臨床に転換され、効果を生むのか検討する研究へ発展させる予定であり、すでに研究費取得済みである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計4件)

- 山本真梨子, 富貴田景子, 坂之上香, 高塚聖子, 小林奈美. 最近の研究における、在宅要介護高齢者の「家族」の捉え方—「家族」の定義と対象者の属性に関する文献的検討から—。日本家族看護学会第15回学術集会。2008. 9. 13. 神奈川
- 小林奈美, 山本真梨子, 富貴田景子, 坂之上香. 看護教育を行う専門学校・短大・大学における家族看護教育の実態—関連科目担当教員に対するアンケート調査より—。日本家族看護学会第15回学術集会。2008. 9. 13. 神奈川
- 小林奈美, 田中志保, 大野佳子, 大野佐津樹, 徳久朋子. 夫婦間の介護分担に対する期待への夫婦関係と世間体意識の影響。日

本家族看護学会第 12 回学術集会. 2005.

9.3. 千葉

4. 小林奈美, 恒松景子, 坂之上香, 植屋明代.
日常の職場風土に活かす家族看護モデル
の学び方. 日本家族看護学会第 12 回学術
集会. 2005. 9.3. 千葉

[図書] (計 2 件)

1. 小林奈美. 実践力を高める家族アセスメン
ト PartI.ーカルガリー式家族看護モデル
実践へのセカンドステップー. 医歯薬出
版. 2009. 206 ページ.
2. 小林奈美. グループワークで学ぶ家族看護
論ーカルガリー式家族看護モデル実践へ
のファーストステップー. 医歯薬出版.
2006. 124 ページ.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 奈美 (KOBAYASHI NAMI)

鹿児島大学・医学部・教授

研究者番号: 90311406